

第 2 回 SPARC Japan セミナー2014

「大学における OA ポリシー：日本版 OA ポリシーのモデル構築に向けて」

リエージュ大学から学ぶ OA ポリシー策定方針

林 和宏

(名古屋工業大学附属図書館/DRF)

講演要旨

リエージュ大学の OA ポリシーは、リエージュモデルと呼ばれ、ほぼ 100% の論文についてリポジトリ登録を実現している。この講演では、そのポリシー策定の経緯、概念、運用について、調査・インタビューを行った結果を報告するとともに、名古屋工業大学とも比較しながら、OA ポリシーの在り方を検討する。



林 和宏

2002年より名古屋工業大学附属図書館に勤務し、閲覧業務、ILL業務、契約業務、リポジトリ業務等に携わる。デジタルリポジトリ連合 (DRF) 企画ワーキング・グループでも活動中。

名古屋工業大学は、2012 年より研究論文について、原則、リポジトリに登録するという方針を設けて運用している国内では数少ない大学の一つです。制度を設ける際には、国内では岡山大学や北陸先端科学技術大学院大学を参考にしましたが、海外ではリエージュ大学の制度から学ぶことが多くありました。リエージュ大学の OA ポリシーは「リエージュモデル」とも言われ、グリーン OA の理想的な形として知られています。本日は本学の状況と比較しながら、リエージュ大学の OA ポリシーについて調査したことを報告します。

リエージュ大学の OA ポリシーの要点・目的

まず、本学とリエージュ大学の違いです (図 1・2)。

比較で並べた際に分かりやすいように、リエージュ大学にはリエージュワッフル、名古屋工業大学にはういろうのアイコンを付けました。

大学概要	
	
	リエージュ大学 Université de Liège / University of Liège 学生数 20,000 教員数 2,800 職員数 1,300 総合大学 (7学部/1大学院/1研究所) http://www.ulg.ac.be/
	名古屋工業大学 Nagoya Institute of Technology 学生数 5,700 教員数 340 職員数 175 工学系単科大学 http://www.nitech.ac.jp/

(図 1)

リエージュ大学はベルギー南部ワロン地方に位置する総合大学で、学生数が約 2 万人です。名古屋工業大学は工業系の単科大学で、学生数が約 5,700 人です。

リエージュ大学の OA ポリシーで最も特徴的なのは、研究者に論文の公表だけを直接要求するのではなく、これまでもあった評価（広報・補助金申請等）の一連のワークフローの大元にリポジトリを位置付けるという点です（図 3）。このため、研究者にとってはリポジトリに登録する義務が生じますが、同時に、評価（広報・補助金申請等）でリポジトリを活用するメリットも得られることになっています。

なお、「2002 年以降のすべて」となっていますが、この OA ポリシーが出たのは 2007 年ですから、5 年間分も遡及して過去の論文にも適用するという点で始まったようです。本学でも、1 年間だけの遡及は行いましたが、第一著者への確認が取れない、既に出版社と著者版原稿がないなどの課題があったので、5 年間というのはかなり長い遡及期間かと思えます。

リエージュ大学の OA ポリシーには、①大学の成果を知らせる、②研究成果の可視性を向上させる、③コストを削減するという目的が根本にあります。①と②はリポジトリ設置をする場合の一般的な目的かと思えます。③は具体的には学術流通に掛かるコストを抑えるということです。

このため、「Green First」といって、グリーン OA を優先する方針を取っています。ただ「リポジトリを推進する」と言っても呼び掛けるだけではうまくいかな

い、実際にリポジトリの網羅的な登録がなければ、大学の成果を集めたリポジトリとも言えないということで、実際に義務化によって生じるであろう効果を調査しつつ、制度化が必要であると考えたそうです。

そうは言っても、具体的な経験をどんどん重ねて実際に始まったかという点、実はささいなきっかけから始まったそうです。ライブラリアンの Paul Thirion さんが学長の Rentier さんに軽い気持ちで義務化の理想を語ったところ、それに学長が「OK, we'll do it! (よし、やってみようじゃないか)」と答えたことで決まりました。ただ、これ以前にも学長は OA の考え方に理解を示していたということなので、トップがまず OA に対して理解を持つことは、ポリシーの策定に関わる第一条件かと思えます。

この後、Rentier 学長は大学としての義務化の方針を採択するため、Thirion さんと教員へ説明を繰り返して、リポジトリの公開前に義務化を実施しました。Rentier 学長は現在も学外学内で OA 推進のための活動をされており、ブログをのぞくと頻繁に OA を話題にしています。学長自身がここまでされているケースは世界的にもまれです。

本学の場合、そもそもの始まりは、私が許諾確認の困難さを前図書館長に伝えたところ、それなら制度化によって解決したらどうかと提案されたことから始まっています。これも軽い会話から始まっているので、軽い会話がきっかけで始まるのはよくあることなのかと思えます。そこから、前図書館長と共に学内の会議

リポジトリ概要

ORBi Open Repository and Bibliography
2008年公開 (OA Policy 2007年より実施)
アイテム数 12万件
ダウンロード数 年間 372万件程度

名古屋工業大学学術機関リポジトリ
2008年公開 (OA Policy 2012年より実施)
アイテム数 3659
ダウンロード数 年間28万件程度

3

(図 2)

リエージュ大学の OA ポリシーの要点

We decided to make mandatory the full text for every scientific article since 2002.
To ensure that this obligation will be respected, we add the fact that only publications in the repository will be considered in any internal evaluation (promotion, financing etc...).

私たちは、2002 年以降のすべての学術論文について、全文登録の義務化を決定しました。
この義務を確実にするため、リポジトリに登録された出版物だけが、学内評価（広報、補助金申請等）の対象になるという条項を追加しました。

4


(図 3)

で前学長への説明を行いました。前図書館長がそこで強く制度化を押し下さったことと、前学長自身も機関の説明責任という観点で OA に理解のある研究者だったことで、実施が決定したと考えています。

リエージュ大学の制度運用

ここからは、リエージュ大学の制度運用についてお話しします。基本的には、研究者自身が登録を行うという研究者中心のシステムとなっています(図4)。私は最初それを聞いたときになんか驚きました。本学では、登録に係る全ての作業はほとんど図書館側で行っているため、かなり大きな違いがあります。リエージュ大学の図書館側で行っている作業は、定期刊行物リストのメンテナンスやサポートです。24時間以内に回答するというようなサポート体制に力を割いていて、実際の登録のための作業はほとんどないそうです。

リエージュ大学の制度運用 1



登録は基本的には、著者自身が行い、データについて著者が全責任を負う(著者がシステムの中心)。

このため、可能な限り、システムはユーザーフレンドリーに設計されている。

- PubMed, Scopus, Bibtext, Endnote からインポート可能
- 定期刊行物の正確なタイトル・ISSN・査読ステータスを入力時に流用可能
- 研究者情報への自動リンク作成
- doi, ISSN, ISBN のチェック機能
- 登録作業における、ヘルプや入力例

図書館が抽出チェックを行い、誤りを発見することもあるが、その場合も、図書館では修正せず、著者へは修正点を通知するのみ。

7

(図4)


このため、リポジトリを行う図書館職員も 1.5FTE と伺いました。この規模の大学でこの登録数を考えると、恐ろしく少ないですが、それでも可能な運用の仕方を行っています。また、メタデータの誤りも研究者自身に修正させるという徹底ぶりです。

また、日本では出版社ポリシーのチェックは図書館側で行うことが多いですが、リエージュ大学では研究者が行うことになっています(図5)。これはリエージュ大学の制度設計の重要な方針で、研究者がやらないことを恐れて図書館でやってしまっはいけない、研究者を OA の現場に巻き込まなければならないという考え方が根底にあるそうです。

一方で、評価関係は義務の理由ともなるものですが、リポジトリのデータ登録がきちんと済めば、そこから評価に必要なシートが自動で生成されるようになっています。インパクトファクターやダウンロード回数、評価の指標なども合わせて表示されて、それを各学部へ提出することを義務付けています。

また、リポジトリに登録することで、助成機関による OA ポリシーにも対応しています(図6)。もう終了したかと思いますが、FP7 Project の OA ポリシーにも準拠しています。さらに、FNRS (ベルギー・フランス語圏の国立科学研究基金) は、リエージュ大学の制度を参考にして始まり、大学の方針が国、その地方の OA ポリシーにも影響を与えています。同様の公開義務を定めているので、各大学のリポジトリからデータがハーベストされ、特別な登録作業等をリエージュ

リエージュ大学の制度運用 2



著者が出版社ポリシーを確認し、アクセスレベルを決定する責任も著者にある。

図書館は、Sherpa/Romeo 等のサイトへリンクを作成するなど確認のプロセスを助けるが、実際の作業は行わない。


評価のため各学部で提出が必要な、研究成果の公表情報を作成するツールを開発。

自動生成される評価シートは、書誌情報、査読ステータス、評価指標(インパクトファクター、h-index、DL回数、等)、全文へのリンク、公開レベル等が表示される。

8

(図5)

リエージュ大学の制度運用 3



助成機関による OA ポリシーにも対応。

- FP7 Project の OA ポリシーにも準拠しており、2重の登録は不要
- FNRS (ベルギーフランス語圏の国立科学研究基金) は、リエージュ大学と同様の公開義務を定めた。これにより各大学のリポジトリからデータはハーベストされる。

管理するだけでなく、集積された情報を様々な方法で、有効に再利用することを助けるためのツール

- 研究成果の公表一覧リスト
- CSV等によるデータエクスポート機能、利用統計
- ウィジェットによるデータ利用
- 制限付き論文について、著者への全文請求メール通知機能

9

(図6)

大学の教員がする必要はないということです。

他のデータ活用の例としては、研究成果の公表一覧リストや CSV によるデータエクスポート機能、利用統計、ウィジェットによるデータ利用が用意されており、研究者が活用することを考えて設計されています。

また、100%登録といっても、出版社ポリシーにより公表できない論文も多く存在しています。これについては、論文が読めなかった利用者から著者へ全文請求のためのメールを送る機能も付いています。これが OA と言えるのかという議論もあるそうですが、間違いなく研究者を OA の現場に巻き込む仕掛けであるのではないかと私は感じました。

このように、制度全体が研究者を中心に据えているため、その制度をいかに浸透させるかが大きな課題になってくるかと思われませんが、リエージュ大学は義務そのものを浸透させるのではなく、OA の考えを浸透させるという方針を持っています。ORBi というリポジトリのサイトは、最初に OA 関係のニュースが飛び込んでくるような外観になっています。先に述べた学長のブログもそうですが、制度構築後も盛んに OA アドボカシーを行っています。

一見厳しいような制度にも見えますが、公開に至っては研究者の自主性を尊重しているとも言えますし、そういう意味では、制度は可能性を開くだけということをよく分かった上で運用を行っています。

ゴールド OA への対応

近年では、OA ジャーナルが急速に発展してきていますが、リエージュ大学の OA ポリシーは、Green first です。この点でどのように対応しているかを確認してみました。

Green first はフェアなゴールド OA は支援するという方針です。フェアの定義は、「著者にとっても無料か、査読や出版に掛かる費用に見合う APC であること」になります。学術流通のコストが膨らむだけのような OA ジャーナルは支持しないと言っています。

また、ORBi の登録は必須としています。これも教

員が学術情報を活用することを考える上では確かに必要かと思えます。また、自ら PoPuPS という無料の OA ジャーナルの運営を 1 年前から始めています。

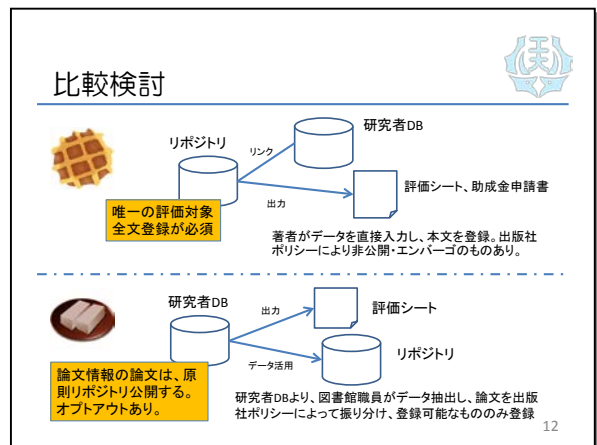
比較検討

本学の制度との大きな違いは、リポジトリの登録データ自体を評価対象としているかどうかです (図 7)。リエージュ大学では、本文データが必須のリポジトリに登録されたデータを唯一の評価対象と宣言し、それに合わせたフローも作っています。この場合、リポジトリが非公開のアイテムも抱えるという問題はあるにしても、データ活用のさまざまな展開が可能です。

図で説明すると、全ての基になる評価対象ということで、リポジトリ自体を登録必須にしています。全文を登録することが必須となり、評価シートと助成金申請書などが出力できます。また、研究者データベースにもリンクしているという形になっています。

これに対して本学では、研究者データベースの方が評価に関係が深く、ここからデータ活用して評価シートを出しています。同じような形でデータを活用し、リポジトリの場合はデータを登録しています。

研究者データベースに登録された論文情報は、評価シートへの出力のためにリポジトリに登録しなければいけないことになっています。これにより、登録された論文について特に図書館に対してリポジトリの登録をやめるという通知がなければ、そのままデータを活用して図書館はリポジトリに登録の手続きを行うこと



(図 7)

になっています。研究者データベースより抽出したデータを使って、論文を出版社ポリシーに振り分けて登録可能なもののみを登録している形です。このため、100%本文あり OA 公開となっています。

しかし、研究成果の一部を登録しているだけなので、データの活用は限定されてきています。リエージュ大学のようにデータをいろいろな形で活用することを考えると、研究者データベースをまとめた有効な活用の仕方を考えなければいけないと思われま

本学の課題

リエージュ大学の制度を学んで考えられる本学の課題には、「本文収集の方法」「アドボカシーの方法」

「制度設計の整理」があります。

本文収集の方法は、現在は研究者が研究者データベースに評価のために登録し、図書館がそれを抽出したリストを利用して登録作業を行っています。図書館が出版社ポリシーを確認して、必要であれば出版社版を利用してというフローになっているため、登録までの期間が長くなるという問題があります。長くなれば、著者版の入手も困難になるため、これは大きな問題かと考えています。リエージュ大学の方式は非常にスピーディーな形で研究成果を公開する仕組みになっているので、その点についてはリエージュ大学から学ぶことが大きいです。

アドボカシーの方法は、研究者の負担を最小限にすることは、本学の場合、学内合意のときの条件でもあったので致し方ないところでもありますが、これにより、研究者が OA について意識することはほとんどなくなっているように私自身は感じています。少なくとも何かしらの働き掛けをしなければいけないと思っています。リエージュ大学でさえあのような制度を取っていないながら、いろいろな OA のアドボカシーを行っているため、それを参考にしていきたいです。

制度設計の整理は、OA ジャーナルで公開された論文や本文公開制限ありの論文の取り扱いについて、本学では詳細を決めていない状況にあるので、これもリ

エージュ大学の方法などを参考に決定していかなければいけないと思っています。OA ジャーナルに投稿する研究者も増えているので、これをリポジトリに登録すべきかという問題にも直面していますが、今のところ、大学の研究成果を集約するという意味では必要かと考えています。


リエージュ大学は、本文が公開できるにせよ、できないにせよ、全てをリポジトリに登録するという方法を取っていますが、これについてはデータ等の整備により、きちんと本文にたどり着けるようなルートを示しています。そのようなことを考えると、研究成果にたどり着けるようなルートを図書館が確保するのは非常に重要なことかと思いました。

今回の発表に当たり、メールインタビューによってリエージュ大学のヘッドライブラリアンである Paul Thirion 氏から多くの情報を頂きましたので、感謝申し上げます (図 8)。こちらのイラストは ORBi の理想をイラストにしたものです。OA ウィークの際にベルギーの有名な漫画家に描いてもらったそうです。

また、Paul Thirion 氏から、日本の大学でこれから OA ポリシー検討を始める方へのメッセージを頂きました (図 9)。この場では掲載するにとどめ、近いうちにどこかで報告したいと思っています。



(図 8)

メッセージ 

Paul Thirion氏 (Head Librarian University of Liege Library) より、日本の大学で、これからOAポリシー検討を始める方へメッセージをいただきました。

- Establish a strong mandate with real and consistent policy is possible. The mandate has to cover simultaneously metadata AND FT.
- Authors are the most important. They have to be in the core of the system. Tools have to be designed for them and not for librarians. The workflow has to be designed to bet as "user-friendly" as possible. Many institutions decide to le librarians do the deposit instead of authors because they fear that the authors will never do it. For us it's a "false good" idea. Scholars have to be convinced and active in OA development.

And more...

16

(図 9)